

雨の迎え入れ

(User02 ミナのプレイヤーが読み上げてください)

外はまだ雨が降っていた。

雨は苦手だ。

どうしてかわからないけれど、濡れた地面を見ると胸がざわつく。

誰かに置いて行かれたような気持ちになって落ち着かなくなるのだ。

家の中は静かで、時計の針の音がやけに大きく響いていた。

さっき慎一さんからメッセージがあった。

「親戚の子を、うちで引き取ることにした」と。

名前は……しゅう(柊)というらしい。事故で家族を失ったそうだ。

私と同じ、一人になってしまった子。その子がこれからこの家に来る。

悲しみの形は違っても、孤独の色はたぶん似ている。

鏡の前で前髪を整える。

私はうまく笑えるだろうか。

私のほうが年下で相手がお兄ちゃんだとしても、初めての家はやっぱり不安だと思うから。

きっと、誰かが笑ってくれることが必要だから。

玄関のチャイムが鳴った。心臓が跳ねた。

ドアを開けるとそこに立っていたのは、背の高い男の子だ。

びしょ濡れの傘を握りしめてまっすぐこちらを見ていた。

「……お邪魔します」

これが、私と柊との出会いの記憶。